

「福澤諭吉の手紙 朗読会」

一貫教育の冒険 ②

理工学部教授・コーディネーター **熊倉敬聡**

私と「福澤諭吉」との関係は、つい最近まで非常に微妙なものでした。私は、普通部から慶應なのですが、普通部に入ったとたん——慶應では「先生」は一人で、福澤先生だけが「先生」である。他は、皆互いを「君」で呼び合うのが伝統だ——その他の塾独特の「文化」とともに、洗礼を受けました。何事につけても、超越的なものを崇め奉るのが嫌いな私は、こうした伝統に正直なじめませんでした。それ以降、つい最近まで、お恥ずかしい話ですが、福澤の著作を手取ることはありませんでした。しかし、5年ほど前ででしょうか、仕事の関係でどうしても著作を読まなくてはならなくなり、『福翁自伝』をはじめ数冊を読みました。ところが、そこから伝わってくる福澤の姿は、いわゆる軟派な「慶應ボーイ」では全くなく、(明治という時代なら当然なのかもしれませんが)むしろ野生的とも言っているような姿でした。しかも、破壊的な野生ではなく、建設的な野生の持ち主でした。福澤への悪しき先入観は、一挙に瓦解しました。

創立150年のキーワードの一つが「未来への先導」ですが、まさにこの建設的な野生こそ、その先導を担う者たちに不可欠な(そして多くの日本の若者に欠如している)メンタリティではないかと思ったのです。そこで、ひときわ福澤の個人的な見解や感情が披瀝されている書簡を、一貫教育校の生徒さんたちを含めた「社中」の方々にお読みいただき、混沌とした時代にあつての福澤の建学の心意気を改めて皆で確認したいと思い、今回の朗読会を企画したしだいです。

昨年の「平家物語群読会」同様、今回も、幼稚舎の鈴木秀樹先生と志木高校の速水淳子先生に様々にご協力いただきながら、約半年をかけ、ゆっくりと準備をしていきました。当初の計画では、一貫教育校全校に参加してもらう予定でしたが、諸般の事情で、幼稚舎、中等部、志木高校にとどまり、しかしながら、最終段階で、演劇サークルの大学生や、横山教養研究センター所長、塩澤経済学部長、佐藤看護医療学部長、工藤常任理事にまでご参加いただき、賑やかな会となりました。さらには、OGの紺野美沙子さんが、司会進行役と朗読を引き受けてくださり、一段と華やかさが増しました。

本番当日は、同じ社中にありながら、ふだんほとんど顔を合わせる機会もない者同士が、懸命に稽古し合い、互いの声に刺激されながら、自らのパフォーマンスを磨いていくという、一貫教育校ならではの、学びの場が作られていきました。結果、前回の群読会に劣らない感動を、聴衆に与えたのではないのでしょうか。

慶應義塾は、学内外に「一貫教育校」と謳っているがゆえに、本来こうした場は、日常茶飯事でなくてはならないはずですが、現状では残念ながら、地理的・制度的障壁が高すぎるのか、稀なこととして企画しなくてはなりません。創立150年に当たり、一日も早くこうした光景が「日常」となってくれることを願ってやみません。

幼稚園における朗読会への取り組み

今回の朗読会は教養研究センター主催の「一貫教育の冒険」シリーズとしては2回目ということになるが、幼稚園6年O組の児童にとっては3回目の朗読会ということになる。はじめは平成16年度、彼らが4年生の時に志木高校と合同で『古事記』を読んだ。その時は、小学生にとってはそれこそ日本語とは思えないような言葉を必死に読ませたのだが、今年の『平家物語』を経た後の3回目となる今回はずいぶんと勝手が違った。

まずテキストが『福澤諭吉の手紙』であることによる親しみやすさが上げられよう。幼稚園では、一年生が学習発表会で「福澤諭吉ここにあり」という歌を歌うことになっていたり、2月3日のご命日には多くの幼稚園生が善福寺へ墓参に行っていたりする。そうやって親しんできた福澤諭吉であるから、ヤマトタケルや源義経とは親密度が違う。今回のテキストを読んでいる中でも、山口良蔵宛の手紙にしたためられた慶應義塾創立に寄せる想いには熱いものを感じたりするのだ。一方で「バター、好きだったのかあ」といった発見もするところが、また面白い。

次にテキストが古事記や平家物語に比べれば断然、読みやすいことも重要だ。「お取り計らい成られたく存じ奉り候」は確かに馴染みのない言い回しだが、「僕は学校の先生にあらず、生徒は僕の門人にあらず」などは、十分にわかるし、「実に日本第一流にして、舶来品を圧倒するものなり」という言い回しも感情を込めやすい。6年生だから、ということもあるが、練習は前回、前々回に比べたら格段に楽だった。

最後に、書かれている内容が歴史的な実感を伴って子どもたちに伝わったことが大きいと感じている。例えば幼稚園の初代舎長和田義郎に送った手紙。女子教育について福澤がどのようなリクエストを出していたのかを知ることは、子どもたちにとっても十分に面白い。また大隈重信宛の園遊会への招待状。歴史で勉強した大隈重信



鈴木 秀樹

慶應義塾幼稚園教諭。塾員（平2社修）。1998年玉川大学文学部教育学科初等教育専攻卒業。91年より現職。2000年にサウンド・エクスプローラ部を創設。「音を聴く」魅力を伝える教育を実践している。



やら伊藤博文やらが、自分たちが学んでいるこの地で酒を飲んでいた、という事実は子どもたちを大きく興奮させる。

そんなわけで、幼稚園生としては上記のような理由で取り組みやすかったこともあって「出来ることは全てやった」という気持ちでいる。その上に今回は中学生、高校生の朗読に止まらず、大人の朗読を聴けたことは大きな財産となった。特に自分たちが読んでも、どうしても格好がつかなかった神津国助宛の不動産購入を断る手紙を、紺野美沙子さんに読んでいただけたのは大きかった。後で感想を聞いてみたのだが、紺野さんの感情の込め方、声そのものの美しさは子どもたちの心を大きく揺さぶったようである。

6年O組の子どもたちにとっては、3年連続で取り組んできた群読も今回でお終いとなったわけだが、それぞれ進学先の中学・高校から、またこの会に参加する子が出てくれたら、こんな嬉しいことはない。今回の感想の中で、「高校生や大人の朗読を聞いていると『自分も大人になったらああいう声になるのかな』と思ってワクワクした」というものがあつた。ぜひ試して欲しいと願っている。

児童の視点から

紺野さんはとても綺麗な方で、声がすき通っていて聞きやすく素晴らしい方でした。私たちのことを気づかってくださったり、可愛がってくださいました。朗読では文の大事な所を強調したりしていましたし、司会でも要点をしっかりまとめて、お客さんにどんな手紙かを簡単にわかりやすく説明してくださいました。

朗読会を通して、福澤諭吉先生の日常や考え方、家族の事も知ることが出来て、福澤先生は凄い方だなあと改めて思いました。

ソロパートを読む時は、なかなか声が出なかったし、他の人が一緒に読んでしまうことも多かったのが苦労したこともありましたが、この朗読会は大切な思い出になりました。もし機会があれば、また朗読会に参加したいと思います。

（梅村実礼）

中等部における朗読会への取り組み

朗読会へのお誘いがあり、中等部では新入りの私が引率することになった。というのも、この朗読会の中心となっていっしょに速水先生には、教育実習で大変お世話になったというご縁がある。当時、ちょうどこれからなされる『平家物語』の授業について計画を練っていっしょなところだったと記憶している。その後、志木高生の『平家物語』群読を噂に聞き、陰ながら拍手喝采していたのだ。その速水先生とご一緒させていただけるとのことで、喜んで手を挙げさせていただいたというわけだ。

二学期に入って授業で募集をかけたところ、1、2年あわせて7名の生徒が参加することになった。また、募集と並行して手紙を選んだ。中等部生らしく、朗読に適したものをとあれこれ考えたのだが、なかなかぴんとくるものが見つからなかった。そこで、先輩に相談すると、福澤先生が自作の詩を揮毫された掛け軸が図書室にあり、この詩を引用した井上角五郎宛の手紙がよかろうと紹介された。前半は、井上に対し朝鮮滞在中の心構えを助言したもので、歴史的背景を知らないと理解の難しい内容。後半は、日本側の近況を伝えており、ここに2人の息子の留学に際した漢詩2編が引用されている。

手紙も決まり、展覧会明けの11月中旬から練習を始めた。放課後はそれぞれ校友会活動や習い事があるので、毎週火曜日の昼休み、15分ほどの時間をあてることにした。もちろん、それだけでは時間が足りないので、個人個人で練習してきた上で集まり、修正のためのアドバイスをするというスタイルをとった。さすがに有志だけあって、ひと通りつかえずに読むところまではすぐにできるようになった。しかし、前半を中心にわかりにくい部分が多く、言葉の抑揚や、フレーズの取り方などに関しては、うまくいかないところが少なくなかった。また、練習ではマイクを使わなかったこともあって、朗読のテンポも速めになりがちだった。こういった部分を中心に修正していき、本番を迎えた。

2月4日の本番当日、通しのリハーサルが午前中にあっ



前北 馨

慶應義塾大学文学部卒業、
大学院文学研究科修士課程修了。
平成18年4月から慶應義塾中等部教諭。



た。幼稚舎生や志木高生の完成された発表に呑まれたのか、出演者だけとはいえ大勢の聴衆を前にしたせいなのか、中等部生は少し元気がなかった。舞台からおりてきた生徒たちからは、照明の眩しさ、マイクの高さに関する注文が相次いだ。そこで、セッティングを変更した上で、中等部生だけが残って、もう一度リハーサルをさせてもらえることになった。これが幸いした。他の出演者の発表に発奮した中等部生は落ち着きも取り戻し、本番では実に堂々たる発表をすることができた。ありきたりの言い回ししかできないが、ひと回り成長できたのではないかと思った。客席に戻ってきた生徒たちは、非常にいい顔をしていた。嬉しくなった私も、満面の笑みを浮かべていたことと思う。

生徒の視点から

生徒たちのエンジンがかかってきたのは、年が明けてからだだった。一つアドバイスをすると、その部分を繰り返し練習し、また次のアドバイスを求めるという様子が見られるようになってきた。それなりに試行錯誤して本番の日を迎えたようだった。

そして、当日。幼稚舎出身の生徒が多かったこともあって、下級生に負けてはいられないという気持ちが出たのだろう。リハーサルの1回目、2回目とぐんぐん良くなっていき、本番は持てる力以上のものが出せたようだった。

後日行った反省会では、自分たちの発表にはもう満足していたようで、幼稚舎生の統率のとれた発表や志木高生、大学生の声の素晴らしさに対する称賛が話題の中心となっていた。

志木高における朗読会への取り組み

手紙の魅力は肩肘張らない、その人の日常が窺われるという点にある。福澤諭吉の手紙には日常生活における雑多な、些細な出来事が数限りなく登場する。そこから垣間見える人間福澤に触れて感じたものを、朗読の中に表現してもらおうという企画である。

明治期の手紙を読むことは、幼稚舎生から大学生に至るまで誰にとってもやさしいことではない。幼稚舎鈴木組の子供たちにとっては三回目の朗読会になる今年、漢文口調の強い『福澤諭吉の手紙』を取り上げることにした。ちなみに一年目は『古事記』、二年目は『平家物語』を朗読している。古典的な日本語のリズムを一通り体験してもらおうという目的もあった。明治期の手紙は、確かに耳で聞いてわかりやすいものではなかった。もっと有名な文章を朗読してくれた方がわかりやすかったのではという意見もある。が、この『福澤諭吉の手紙』が岩波文庫に入ったのは比較的最近のことで、おそらくこの手紙が音読される機会は今まであまりなかったと思われる。他の有名な文章ではなく今回手紙を選んだ理由はここにある。

今回のもう一つの試みは、小学生、中学生、高校生、大学生、そして教員が同じ作品を分け合って読むということだった。これもおそらく今までに試されたことの少ない形であろう。以前から朗読会を大人から子どもまでが参加する形で開くことはできないかと考えていた。朗読は、言うまでもないことだが、巧い下手を競うものではない。読みの巧さを比較するものでもない。人間の声には年齢、性別、個性、それぞれの魅力があるのだし、声に出されることによって伝わる読み手それぞれの解釈や感じ方がある。それを楽しむものだと思う。今回慶應義塾で学び教える者たちが一堂に会し、福澤諭吉の手紙を朗読した。本番前、舞台下には先生方と子どもたちが等しく手紙本文に真剣に没入する姿があった。結果として温かい舞台



速水 淳子

慶應義塾志木高等学校国語科教諭。志木に来て十年目。古典朗読の授業を続けている。2000年12月三田世紀送迎会における「平家物語 木曾最期」群読、2003年1月アートセンター主催「生命を寿ぐ高校生の声の力」。



を作り上げることができた。

子どもたちの為に時間を割き、子どもたちと共に快く舞台に立ってくださった先生方には心から感謝申し上げます。皆、心をこめて読んでくださった。子どもたちにとって得難い体験であったろう。また紺野美沙子さんの温かい舞台運びも忘れられない。こうした皆様の温かいお志の積み重ねによって実現できた舞台だった。

幼稚舎の鈴木秀樹先生にお声をかけていただき、鈴木組の子どもたちと朗読企画を始めてから三年が経った。鈴木組の子どもたちの伸びやかな声、弾みのある読みに魅了された三年間だった。古典のリズムを飲み込む力が、小学生にこれだけ備わっているのだということも教わった。古典教育のあり方に一石を投じることにもなりそう。鈴木先生には心から御礼を申し上げたい。

生徒の視点から

今回参加したのは高校二年生二名である。馬場辰猪宛の手紙は四月の授業で漢文入門として取り上げ、クラス全員で朗読したものである。その後、今回の朗読会のために練習したのは一月に入ってから三回である。もともと声のよく出ている生徒たちであったので、発声等の練習は取り立てて行っていない。短い手紙であるが二つに分け分担して読むことにした。言いにくいところを練習し、どこに山場を作って読むかをそれぞれに考えてもらった。馬場辰猪の生涯について簡単に話し、また福澤諭吉にとって馬場辰猪は期待の弟子であったことにも触れた。朗読会で映写されたロンドン留学時代の馬場辰猪の写真も見てもらった。練習において、二人は自ら読みの工夫を重ねていた。本番の二人の読みを聞いていて、読む楽しさを覚えたなと思った。

参加者の視点から——「少しの後悔と大きな満足感」

看護医療学部長 佐藤蓉子

朗読会への参加のお誘いを頂いたときは、まず「群読」ということに惹かれた。大勢の人が互いの声を聞き合いながら呼吸を合わせて、自尊館にひとつの物語世界を創造していく。その瞬間を想像して心が躍った。幼稚舎の児童や中等部などの生徒たちとの共同作業は、ここにおいては機会がないだろう。一方で舞台の上で朗読するなど 50 年も前の小学生の頃以来なので場の雰囲気壊してしまうことを危惧し、しばしの葛藤があった。最後は、共同作業への誘惑が勝って参加を決めた。1 月末に朗読用の原稿が送られてきた。それを読んで、思わず唖った。福澤諭吉が怒っている。養生園（北里柴三郎が園長を務めた結核療養所）から、自宅に送られてきたミルクが汚染されていたと怒っている。これは使用人の不注意のせいばかりではなく、院長をはじめとする管理責任を問うべきで、後日にいたるまでも小言の種とするのでこのままのかたちで保存しておくようにと叱責している。この手紙が書かれたのは明治

29 年だが、平成のいまでも某乳業メーカーの所業として起こっている事件でもある。本来なすべきことを疎かにしたために起こる事件はいつの時代にもある。看護を専門とする者にこの内容を読ませるといふ企画構成者の計らいにも感心した。

本番では、福澤の怒りを伝えるために、同時に、医療関係者としての自戒の意を込めて下腹に力を入れて読んだ。中・高・大学生たちのように耳に快く響く朗々とした朗読には及ばないが、とにかく一語ずつ明確に伝わるようにと思って読み上げた。

幼稚舎児童の声は、期待通りに高く澄んで圧倒的に会場に響き渡った。みんな暗記するほどに読み込んで互いの声の響きを確かめ合いながら、余裕をもって朗読している。私ももっと練習しておくべきだったという少しの後悔と、ひとつの世界の創造に参加した満足感をもって朗読会は終了した。

参加者の視点から——「試験を受ける塾生のような心境で参加して」

経済学部長 塩澤修平

幼稚舎の食堂の陽だまりで、大学教員が数人と女優が一人、椅子に座ったり歩き回ったりと、思い思いの格好でぶつぶつと何やら朗読の練習をしている。その姿は、自分もその中の一員ではあったが何ともユーモラスといえた。これは 2 月 4 日に行われた、「福澤諭吉の手紙 朗読会」、開会直前の光景である。日ごろ講義や、あるいは会議で文書を読み上げることはよくやっているが、このような朗読の機会はほとんどなく、まるで試験前の塾生のような心境であった。ただ塾生と違って文庫本ではなく、年齢を考慮されたのか、先生の手紙を大きな活字でコピーしたものを手渡されたのも、主催者の心遣いが感じられ有り難かった。

紺野美紗子さん司会のもと、私に朗読が割り当てられたのは、留学中であった次男の捨次郎氏宛明治 23 年の書簡である。脇差をいじっていて手を怪我した福澤先生が、「おとっさんの評判甚だ宜しからず・・・誠に面目なき次第」とう状況になり、その話は一週間限りにしてもらいたいと「子供へ談判中なり」、という内容である。先生が子煩悩な家族思いであったことは知っていたが、この手紙を読んだのは初めてであり、先生の温かくユーモアあふれる人間性の一端にあらためて触れる思いがした。

このように、幼稚舎生から大学教員までの各世代、そして普段接する機会のあまりない塾関係者が一堂に会して、ひとつのことは行うことはとても意義のあることである。ましてそれが福澤先生の手紙の朗読となればなおさらであり、一貫教育を行っている慶應義塾ならではのことであろう。

ただしそうであるだけに、もっと大々的に宣伝してもよかったかと思われる。また、実際に朗読する人だけでなく、一般の来場者にももう少し何かが得られるようにした方がよりよかったかもしれない。もちろん場内では一部資料の展示や興味深い写真などがスクリーンに写されて、読まれた手紙の背景、当時の社会情勢、慶應義塾の実態などについて説明があったが、より詳しい解説あるいは関係する内容の講演、そしてあまり目にする機会のない多くの資料の展示なども合わせることによって、来場者に朗読を聴くこと以外の満足をも与えられれば、こうした試みはさらに意義のあるものになり、一層の発展が見込まれるであろう。

最後にこの会の企画・運営に当たられた方々にあらためて篤く御礼申し上げる次第である。

開かれゆくキャンパス 7 「福澤諭吉の手紙 朗読会」



司会の紺野美沙子氏
(女優、国連開発計画親善大使)



「福澤諭吉の手紙 朗読会」

2007年2月4日(日) (福澤先生生日翌日) 慶應義塾 幼稚舎 自尊館

Web ページ <http://sound.dmc.keio.ac.jp/08/>

参加者の視点から——「福澤諭吉の手紙 陽だまりの中で」

教養研究センター所長 横山千晶

今回の朗読会に参加して、感じたこと。それは、どこで自分は声を失ってしまったのだろうということだった。子供たちの声はまっすぐに通る。銜がない。まっすぐに前を見る。意味を声に乗せて投げかけているのだ。今回は朗読会当日に出演者が初めて顔を合わせ、午前中に1回限りのリハーサルを行った。速水淳子先生と熊倉先生を中心としてすでに当日の段取りが事細かに決まっていたので、こちらはそれにのっとって所定の時間にステージに登り、自分の箇所を読めばよかった。しかし案ずるより産むが易し、とはいかなかった。教師というものは自分の言葉で語ることに慣れているが、他人の言葉をそのまま相手に伝えることは結構苦手である。しかも先ほど朗々と声を響かせてくれた小学生たちがステージの後ろで聞いているとなると、こちらはステージの前と後ろのふたつの聴衆に挟まれたも同然だ。語るのではない、解釈し、聞かせるのだ、と認識した瞬間、はじめに述べたとおり声の前に出なくなった。会場に来てくれた教養研究センター副所長の中島陽子先生に笑われるほどの緊張振りである。

どうにかこの緊張をはぐしてくれたのは、一緒に

朗読してくれた佐藤蓉子看護医療学部長、そして佐藤先生同様、今回の朗読会参加の呼びかけに気持ちよく応えてくれた工藤教和常任理事と塩澤修平経済学部長だった。なによりも昼食時間を惜しんで準備に打ち込む紺野美沙子氏の姿は、萎えた私の気持ちを奮い立たせてくれた。昼食後、学生たちがおのおのの練習に戻ったあとで、われわれ大学教師陣も早速練習に入る。大の大人が真剣に空を見つめながら幼稚舎けやきホールの陽だまりの中で朗読の練習をする姿には、少しこっけいだけれども懐かしい空気が漂っていた。

本番でも異常に緊張した。しかし今度は他人の声を通して福澤先生の言葉が心に沁みわたってきた。久しぶりの爽快感だった。

慶應義塾大学教養研究センター Report No.15
交流・連携セクション(担当:中島陽子)

2007年3月30日発行

代表者 横山千晶

〒223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1

TEL: 045-563-1111 (代表)

lib-arts@ml.hc.keio.ac.jp

<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/>